国立大学法人福島大学

大学番号：14

申立ての内容	申立てへの対応
【評価項目】 ２　項目別評価 Ⅰ　教育研究等の質の向上の状況 （２）附属学校に関する目標 【原文】 附属学校園において、大学教員による指導助言を生かした研究公開、事前研究会、公開授業研究会等の開催、附属学校教員による大学での授業協力、また、大学教員による附属学校での授業、教育活動の協力等、大学と附属学校の連携が図られている。 一方、大学・学部における研究への協力については、附属学校の重要な役割の一つであるにも関わらず、具体的な年度計画等が設定されていないため、今後、適切な年度計画を設定するとともに、計画的な業務の推進に努めることが求められる。 【申立内容】 【修正文案】の通り変更願いたい。 【修正文案】 附属学校園において、大学教員による指導助言を生かした研究公開、事前研究会、公開授業研究会等の開催、附属学校教員による大学での授業協力、また、大学教員による附属学校での授業、教育活動の協力等、大学と附属学校の連携が図られている。 一方、大学・学部における研究への協力については、附属学校の重要な役割の一つであり、具体的な年度計画等が設定されていないものの大学と附属学校が連携した様々な取り組みにより相応の協力が行われている。今後、適切な年度計画を設定するとともに、計画的な業務の推進に努めることが求められる。	【対応】 意見を踏まえ、下記のとおり修正する。 『附属学校園において、大学教員による指導助言を生かした研究公開、事前研究会、公開授業研究会等の開催、附属学校教員による大学での授業協力、また、大学教員による附属学校での授業、教育活動の協力等、大学と附属学校の連携が図られている。 一方、附属学校の重要な役割の一つである大学・学部における研究への協力については、大学・学部と附属学校が連携した研究等の実績はいくつか見られるものの、具体的な年度計画等が設定されていない。今後、適切な年度計画を設定するとともに、計画的な業務の推進に努めることが求められる。』 【理由】 事実関係に即した修正。

【理由】 　各事業年度の実績報告書において報告してきた、「カリキュラム開発室」設置に向けた取り組み（計画【157】）、「ピアサポートプログラム」の実践的研究（年度計画【158】）、附属小学校に設置した「リソースルーム」における活動（計画【159】）、「子育て支援室」設置に向けた取り組みや実際の支援活動（計画【165】）、発達支援相談室「けやき」の開設と相談支援活動（計画【166】）などの取り組みは、大学教員が附属学校園の事業遂行に協力するという一方通行の協力ではなく、学校や地域に現に起きている具体的事例を大学の研究の場で活用することにより、大学の研究の発展につながるものであり、双方向の研究活動といえるものである。それら研究成果の具体例として、「ピアサポートプログラム」の実践を通した研究成果が総合教育研究センター紀要（2006）に掲載されており、その後も定期的に活動報告が掲載されている。また、発達支援相談室「けやき」での実践に基づいたミドルテネシー州立大学とのシンポジウム開催（2007）は、特別支援教育の研究に貢献するものとして県内外において大きな反響を呼ぶなど、大学が研究を遂行する上できわめて重要な役割を果たしている。 　これらの活動を平成21年度も継続して推進するとともに、新規に平成21年度に発足する人間発達文化研究科の教職教育専攻における「教職専門性向上コースワーク」の連携協力を行う。これは、現職教員の研修ニーズに応えるために、附属学校を中心としたフィールドワークや教育実践の事例研究を通じ、学校現場に即した研究を推進するために設定された新研究科のカリキュラムである。平成21年度年度計画としてこの取り組みを設定し、大学と附属学校とが組織的に相互に連携してこのコースワークを実施することにより、学校種に応じたカリ	

キュラム開発の研究に共同で取り組むこととしている。 　このため、評価原案の修正をお願いしたい。	

国立大学法人福島大学　　大学番号：14

申立ての内容	申立てへの対応
【評価項目】 ２　項目別評価 Ⅰ　教育研究等の質の向上の状況 （２）附属学校に関する目標 【原文】 平成16 ～ 19 年度の実績のうち、下記の事項に課題がある。 ○ 中期目標において、「大学と附属学校園及び附属学校園相互の教育上・研究上の連携をいっそう進める」とあるが、大学・学部と附属学校が連携した附属学校を活用する具体的な研究計画の立案・実践の実績が十分ではないため、大学・学部と附属学校が組織的に協力する体制を確立するなど、附属学校の使命・役割を踏まえた積極的な取組が求められる。 【申立内容】 【修正文案】の通り変更願いたい。 【修正文案】 平成16 ～ 19 年度の実績のうち、下記の事項に課題がある。 ○ 中期目標において、「大学と附属学校園及び附属学校園相互の教育上・研究上の連携をいっそう進める」とあるが、大学・学部と附属学校が連携した研究の実績は見られるものの、具体的な研究計画の立案・実践において十分であるとは言えないため、大学・学部と附属学校が組織的に協力する体制を確立するなど、附属学校の使命・役割を踏まえた積極的な取組が求められる。 【理由】 各事業年度の実績報告書において報告してきた、「カリキュラム開発室」設置に向けた取り組み（計画【157】）、「ピアサポ	【対応】 意見を踏まえ、下記のとおり修正する。 ○ 中期目標において、「大学と附属学校園及び附属学校園相互の教育上・研究上の連携をいっそう進める」とあるが、大学・学部と附属学校が連携した研究等の実績はいくつか見られるものの、具体的な研究計画の立案・実践において十分であるとは言えないため、大学・学部と附属学校が組織的に協力する体制を確立するなど、附属学校の使命・役割を踏まえた積極的な取組が求められる。 【理由】 事実関係に即した修正。

ートプログラム」の実践的研究（年度計画【158】）、附属小学校に設置した「リソースルーム」における活動（計画【159】）、「子育て支援室」設置に向けた取り組みや実際の支援活動（計画【165】）、発達支援相談室「けやき」の開設と相談支援活動（計画【166】）などの取り組みは、大学教員が附属学校園の事業遂行に協力するという一方通行の協力ではなく、学校や地域に現に起きている具体的事例を大学の研究の場で活用することにより、大学の研究の発展につながるものであり、双方向の研究活動といえるものである。それら研究成果の具体例として、「ピアサポートプログラム」の実践を通した研究成果が総合教育研究センター紀要（2006）に掲載されており、その後も定期的に活動報告が掲載されている。また、発達支援相談室「けやき」での実践に基づいたミドルテネシー州立大学とのシンポジウム開催（2007）は、特別支援教育の研究に貢献するものとして県内外において大きな反響を呼ぶなど、大学が研究を遂行する上できわめて重要な役割を果たしている。 　これらの活動を平成21年度も継続して推進するとともに、新規に平成21年度に発足する人間発達文化研究科の教職教育専攻における「教職専門性向上コースワーク」の連携協力を行う。これは、現職教員の研修ニーズに応えるために、附属学校を中心としたフィールドワークや教育実践の事例研究を通じ、学校現場に即した研究を推進するために設定された新研究科のカリキュラムである。平成21年度年度計画としてこの取り組みを設定し、大学と附属学校とが組織的に相互に連携してこのコースワークを実施することにより、学校種に応じたカリキュラム開発の研究に共同で取り組むこととしている。 　このため、評価原案の修正をお願いしたい。	